報告（ろの二）

【一】

大正四年に於ける歴史及地理學界に於て先づ最も注意すべきものゝ一つは展覽會と刊行事業の隆盛を極めたることなり。而して其の動機の主なるものは、大典の盛儀の擧行せらるゝに當り國民一般主調は歴史的回顧を生じ、此に關する事項を知らんと欲する要求は、大正三年より大正四年に繼續して更に一層の强度を加へたるに由るものなるべし。卽ち內閣文庫、東京帝室博物館及び南葵文庫の大典關係展覽會、京都文科大學及び京都博物館の奉祝展覽會、大典紀念第一回大藏會、大阪圖書館の大阪府下皇室關係鄕土資料陳列會の如きは只大典に關する資料のみならず文書、美術、文藝の如き、稀覯の資料をも此の機會に於て展覽することを得、更に其の目錄及び紀念出版物の刊行せらるゝあり。又時偶々德川家康三百年祭に際し、日光寶物館の開館、上野美術協會、芝增上寺靜岡等の紀念展覽會、江戸博覽會の如きあり。次ぎて維新史料展覽會開催の如き何れも史學研究上益する所少からざりき。又史籍刊行の事業に至りては、其の主なるものは前年につゞきて刊行せられ、史科の集蒐漸次進步するを見たり。

次に大正三年度に於ける史學界の特色たりし、鄕土研究の興味は稍々衰へたりしが如しと雖も、九州方面

に於ける元寇史蹟の新研究の如き、卽中山博士の「元寇防壘趾と博多灣沿岸の地形變化」、「秀吉再興以前の博多市街の地域につきて」の如き皆精健なる研究を發表せられ、喜田博士の「帝都」「藤原鎌足及び不比等墓所考」、高橋健自氏の「石棺石槨及壙を論ず」、本多博士の「多武峰墓につきて」、の如きは何れも老古學土俗學、人類學方面に關係して年來の懸案たりしものに屬す。又大類博士の城郭の文化史的研究は、此方面に於て最も注意すべきものゝ一つなりき。特に京都文科大學に考古學講座の開かるゝに至りし如き、特記すべきものならん。我國と外國との關係及び國外歴史、地理研究には、「宋末の史蹟より見たる天津地方地形變化」「地中海と伊太利」「中世都市としてのローテンブルグ」等あり。特に倭寇に關しては、「倭寇の說明する國民性の一角」「倭寇と朝鮮水軍」の如き研究、及び倭寇に關する喜田博士、稻葉氏との論究あり。在來比較的資料の缺乏したる此の方面の研究の前年以來益々發展の跡あるが如きは、思ふに國運發展の一面として、世界に於ける日本民族活動史の好資料たるべきものならん。

次に編年史的に研究を統括すれば、上古史に於ては前年に繼續して日本人種に關する白鳥博士、喜田博士の研究あり。又菊地學士の「奈良平安時代の奥羽經營」の如き下りて南北朝時代にては新田氏、足利氏に關するものを主とし、安土桃山時代にありては、歴史地理學會の刊行せる、『安土桃山時代史論』を始め、三浦博士の「朝山同乘と其時代」の如き興味ある論文あり。江戸時代には家康三百年祭の擧行と共に、山路愛山氏の『德川家康』、橫山學士の『家康』あり。歴史地理學會の刊行せる『江戸時代史論』の如きは、江戸時代の政治法制、經濟、學術、藝術、宗敎、風俗等百般の社會現象を細說せるものなり。維新史研究には岡部學士の「建武中興と明治維新」「東京奠都の眞相」の如きあり。此を概觀すれば、近世史研究の發表漸次增加する傾

きあるは、前年度以來の特色として擧ぐべきものなり。次に文化史に於て安藤學士の「保科正之の宗教政策」の如き二三を除きて、他は何れも經濟史的研究なるは注意すべき現象ならん。即三浦博士の「德政の研究」安藤博氏の「德川幕府縣治要略」の如き、從來最缺如せる國民生活の實際に關する研究を生じたるは、亦注意に値すべく、日本文化史は此方面の研究によりて一層の光輝を添ふるに至れり。

朝鮮に關しては、白鳥博士の前年度より續ける「朝鮮語とウラルアルタイ語との比較研究」「言語上より見たる朝鮮の人種」の如き、史學、言語學、人類學上興味ある攻究にして東洋諸邦に關しては『滿洲發達史』『渤海史考』等の如き北方民族に關するもの、及び東西交通に關係せる研究の發表最も多かりしが如し。

西洋史學に關しては、富山房の「時事叢書」、箕作博士の「西洋史新話」等續々刊行せられて、史學の普及に大なる効果を與へたりと雖も、學術的研究に至りては見るべきもの多からず、僅かに淺野學士の「亞細亞民族のスラヴ民族に及ぼせる勢力影響」は東歐研究の試みとして其研究、根本的なるものゝ如く、阪口博士の「獨逸帝國思想の由來」、植村學士の「ドプシュ氏カロリンガ朝時代の經濟發展につきて」の如きは何れも、中世に於ける最も興味ある問題の一つなり。歐洲戰亂に關する研究中他の類書に卓出せるは、原博士の『歐米最近世史十講』吉野博士の『歐州動亂史論』なるべし。

最後に史學の原理に關しては、桑木博士のカントの歴史哲學に就きて」、大塚博士の「リツケルト歴史科學說の批評」、島本學士の「歴史主義對價値主義」、阿部學士の「現代の史學とランプレヒト」の如き數篇に過ぎざりしと雖も、大塚博士のリツケルトの哲學思想に就きての議論の如き近時稀に見る精到なる思索なりき。

【二】

地理に關する研究を概括すれば、(1)南洋、(2)ベルギー、(3)獨逸、(4)パナマの如き何れも時局と關聯を有する論說にして、山崎博士の「南洋に於ける獨逸の領土獲得」、岩崎氏の「南洋の地質」、田中氏の「ベルギーの現狀」「ベルギー人と其都府」の如きは其の主要なるものにして、東戰爭に關する軍事地理研究起れり。小川博士の戰爭の地理的意義の如き其の一つなり。地理教育に關する考案、論文には注意を要するもの多く奈良女子高等師範學校に開催せられたる歴史、地理協議會の如き、歴史地理教育上特記すべき事項に屬す。

【三】

大典の盛儀によりて更に勃興せる國民的精神は、著しく日本帝國の悠久と尊嚴とを意識せしめ、更に歐洲戰亂の經過はいよ〳〵世界に於ける日本帝國の位置を自覺せしむるに足るものあり。大正四年度に於ける研究の大勢は前年に比して特に異常の變化を認めずと雖も、過去、現在、未來に亘る國民的意識を催起せる歴史、地理の實際教育は、將來國運の發展に關して偉大の動力たるものなるべし。

以上大正四年に於ける文科に關する學術中、史學及び地理學に關する研究の大要を報告す。

（文二ノ四　平井せつ）